

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生産とおして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2016年5月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料62円）
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/島田茂 編集人/山根一般
印刷/あかつき印刷株式会社

何気ない日常が
宝の日々

日本基督教団和気教会牧師
のぶ とし
延藤 好英



2011年3月11日、東日本大震災。多くの人が家を失い、家族を失いました。言葉にならない、胸が張り裂けるような思い。平凡に過ぎていた日常が、宝の日々であったことをわたしたちは思い知らされました。

「行ってきます」と声を掛ければ「行ってらっしゃい」と見送る人がいます。「ただいま」と帰れば「お帰り」と迎えてくれる人がいます。子どものころ、友達と夕暮れまで遊んでいると、母が「ご飯よ〜」と呼んでくれ、家に入ると灯りの中、祖父母、父母、兄弟姉妹と一緒に夕飯を食べたものでした。家族と離れて暮らすようになった学生時代、八百屋のアルバイトをしていて自転車で夕暮れの道を走っている時は、通りの家から流れてくる夕飯の匂いに幸せを感じていました。でも、アパートに帰ってくると一人。電気をつけ、テレビを見ながら食事をしていると、アナウンサーの「こんばんは」に、「こんばんは」と答えていました。

今は結婚し、妻がいて、子どもたちがいて、孫たちがいて、一緒に集まっては誕生日を祝ったり、食事をしたり、旅に出ればお土産を買ってきたり……。先日、86歳の父を天に送りました。葬儀場で久しぶりに顔を合わせた親戚の方々。父はこの人たちの中で育ってきたんだなと思いました。そして、わたしもこの人たちの中で優しい心をもったんだなと思いました。

2011年7月1日、震災からの避難母子を受け入れ

るシェアハウス「やすらぎの泉」をわたしが暮らす岡山県でオープンしました。オープンまでの2週間に、ボランティア団体「おいでんせえ岡山」のネットワークを通じて多くの方が集まってくださいました。片道1時間以上もかけて来てくださった方、仕事の帰りに駆けつけてくださった方、ご自身も避難してきた方など約100人。みなさんの合言葉は、「自分の家族を迎える気持ちで」でした。

炊事場ではお湯が出るようにし、台所の窓辺には優しい色のタイルを貼り、見えない所まで雑巾がけをして準備しました。家の中の空気が変わり、清らかさと温もりが感じられる場となりました。避難母子が抱える放射能への恐怖、一番理解してほしい家族にまで理解してもらえない悲しみ……。住み慣れた地を離れ、見ず知らずの町に来て、不安いっぱいの子供が、「ここ」にたどり着きました。その時彼らが感じたのは、「田舎のおばあちゃん家に来たみたい」という安心感だったそうです。

あれから4年半の間に160組を超える母子を迎えました。わたしたちは一緒に語り合い、同じ風景を見てきました。これからどんな道を歩むにしろ、わたしにとって、その一人ひとは、大切な、かけがえのない家族です。まだやっと言葉をしゃべり始めた子どもまで「のぶとうさん」と呼んでくれる。これからもこの子たちの成長を見守り、お母さんたちを応援していく「のぶ・父さん」であり続けたいと思っています。

REPORT

相手と向き合って
心を合わせていくこと。
（仏前：親和・共感的関係の意）

もしも明日
世界が終わるなら

日本バプテスト同盟
総主事
東京平和教会 主任牧師
大矢 直人

皆さん初めまして。東京で牧師をしています。大矢直人と言います。妻はミャンマー連邦共和国の少数民族、カチン族という部族の出身です。子どもはいませんが、高校3年生と中学2年生の2人のめいっ子と一緒に暮らしています。

皆さんは、「ディープ・インパクト」という映画をご存知でしょうか。

もしも、もしもですよ、ある日テレビのスイッチを入れると、総理大臣が緊急の記者会見を開いていて、日本がまもなく大洪水で全滅すると発表していたら、あなたならどうしますか？ 私は、この映画を見て、思わずそう考えてしまいました。

この映画の監督は、「作品を見終わった観客が、それぞれの人生をほんの少しでも見直すチャンスとなるなら」と映画制作の意図を述べています。旧約聖書「創世記」にも、有名な「ノアの箱舟」という物語が書かれています。もしも明日世界が終わるなら、あなたはいったい何をしますでしょうか。

映画では、シェルターに入れるのは100万人ほどの人びとでしたが、旧約聖書では、箱舟に

入れる者とされたのは、神に正しいと認められた「ノアの家族」だけでした。ノアは、大洪水が起こるといって「まだ見ていない事柄」についてお告げを受けた時、誰に何と言われようと、ただ神の言葉を信じて従いました。自分の家族を救うために、神から命じられた通りの長さ・高さ・幅の、巨大な方舟を造ったのです。

大洪水の後、神は私たち人間に「二度と洪水によって、人びとを滅ぼすようなことはしない」と約束し、そのしるしとして「わたしは雲の中にわたしの虹を置く」と言われました。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」と、聖書にあります（ヘブライ人への手紙11章1節）。目の前の繁栄を追い求めるあまり、互いに争い、奪い合うことのないように、真に望んでいる事柄を見失うことのないように、私たちは今日、神が雲の中に置かれた虹を確認したいと思います。

私たちが真に望んでいる事柄。それは、それぞれのルーツやバックグラウンドが違って、神様に命を与えられた「家族」として生きること。さまざまな苦難を乗り越えて、今日、平和な世界を共に創ることではないでしょうか。

Vol.16

We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参画するユースからの発信

◆一橋大学YMCA
◆内容：1887年創立の男子寮。学生の自治によって運営される。現在寮生16人と、寮母が生活を共にしている。

私がこの寮に入ったきっかけは、受験前日にピア配りをしてきた寮の先輩から学校案内をもらったことでした。どちらかというと一人暮らしがたかたか私には、自治寮であり、その上週1回の聖書研究をしていると聞いてかなりの不安を覚えず、親の勧めもあって入寮しました。ところが入寮してみると、先輩寮生は皆個性的で優しく、そうした不安は杞憂に終わりました。苦手意識があった聖書研究では、OBの牧師を招いて、担当の寮生が準備したレジュメをもとに高いレベルの対話・ディスカッションが行われ、とても気に入りました。また、3年生になると幹部として、会計処理や設備見直しなどの寮自治に携わりました。寮生たちとパーベキューや鍋を囲みながら過ごす時間はとても有意義で楽しく、今はこの寮に住めて良かったと思っています。私にとって寮は家族のような存在であり、この寮には住み以上の価値を感じています。最上級生となる今年は、後輩たちにどういった経験を残してあげられるかを同期と熱く語り合い、さまざまな関わりを築いていきたいと思っています。

大崎 友裕 (一橋大学YMCA4年)



全国で行われているプログラムにも積極的に参加。前列左が大崎さん

みんなで子どもたちを育てよう —地域子育て支援拠点「のんびりんこ」

横浜YMCA/スタッフ 北田 純一

横浜YMCAは、2011年度より横浜市中区から地域子育て支援拠点「のんびりんこ」を運営委託されています。「のんびりんこ」は、未就学児(主に0~3歳児)までの親子が、一緒に過ごす場所。安心して子どもを生み育て、子育てに喜びを感じることができる家庭や社会を目指し、子育てを地域全体で支える地域力を創出することを目標としています。横浜市中区は外国につながる方々も多く、中国はじめ韓国、フィリピン、ロシアなど、外国籍の親子にもひんぱんにご利用いただいています。



「パパと遊ぶよ」で、風船に触れたり、たたいてみたり。これなら家庭でも楽しめる

場所にあり、YMCAが行っている活動と日常的に連携しています。特に、YMCAのウェルネス部門は「のんびりんこ」と協働し、保護者や子どもたちの健康づくりなど、子育て支援のさまざまな活動を年間通して行っています。スタジオを使用した「親子でのリズム体操」や、スキンシップを深めて心を通わせる「パパと遊ぶよ」、また、プールでは「ベビースイミング」といった親子で参加できるもの他にも、お子さんと離れて保護者の皆さんにリフレッシュしていただけるプログラムも意識的に取り入れられています。毎年11月には児童虐待防止を推進する「オレンジリボンキャンペーン」への取り組みも一緒に進めています。YMCAは子育てをしている家庭と共に、子どもたちを地域のみんで見守り、育てていこうというメッセージを、行動をすることで社会に発信しています。

私たちは、つながっている —YMCAにある家族のかたち

現代社会において、家族はさまざまなかたちを持つようになりました。それぞれが課題に向き合う日常の中で、隣にいてくれる誰か、喜びも悩みも分かち合える仲間を探しています。YMCAには日々、多くの出会いがあります。YMCAでつながる人と人、地域との結びつきの中で育まれるコミュニティ……。血のつながりがなくても、生まれ育った場所や環境、言語や文化が違って、大切に思っ寄り添う心があれば「家族」。私たちは今を共に生きる「家族」です。

私たちは「神様の家族」 —里親ファミリーホーム操山寮

YMCAせとうち/スタッフ 江木 広海

「里親ファミリーホーム」とは、児童相談所から託された子ども5~6人と共に生活し養育する、小規模住居型児童養育事業のこと。社会的養護の一環として2009年に法制化されたばかりです。YMCAせとうちが運営する「里親ファミリーホーム操山寮」は、2011年に始まりました。私たち養育者は、それぞれの子どもが神様から託された「大切な奇跡の命」だということを常に意識するようにしています。また、子どもたちが「順調に問題だらけ」の境遇を受け止め、問題解決に取り組みながら生きる力を獲得していくことができる場を創造しようと努めています。共同生活を重ねていく中で、「離乳食を作るよ」「お風呂に入れてあげる」と自分より年下の子のことを考え、行動する姿も垣間みられる



朝ご飯を一緒に食べる「家族」の時間

ようになりました。自分からそのように行動できるようになったのは、人とのつながりの中で自尊感情を持てるようになったからです。地域との関係も深くなってきました。アフリカには「ひとりの子どもが育つには、村中の大人全員の関わりが必要」という諺があります。ファミリーホームのある宿本町は、今まさにそんな状態。散歩していると「子どもたちの元気な姿がうれしい」と声を掛けていただいたり、ある日玄関を開けると「月光仮面」という署名とお米のプレゼントがあったり……。信頼できる大人との出会いは、子どもたちの成長の良き糧となっています。今後の大きな課題は、アフターケアです。現行法制上では、18歳になるとホームを巣立っていかねばなりません。課題に向き合い、前向きに生活をしている彼らを「きつと大丈夫」と後押しし、巣立った後も伴走し続ける体制づくりが急務です。同時に、皆さんの周りにもきつといる「ひとりの子ども」をどうぞ支えてあげてください。私たちは、喜びも痛みも分かち合って共に生きる「神様の家族」なのです。

*社会的養護…保護者による養育が困難な子どもを、社会的に養育・保護するとともに、養育に困難を抱える家族への支援を行うこと

子どもたちが安心できるもうひとつの“我が家” —学童保育「ぶらいむ・たいむ」

盛岡YMCA/スタッフ 浅沼 慧

「ぶらいむ・たいむ前湯校」は、学童スペースにお風呂やキッチンなどがあって、まさに家そのもの。ここでは年に一度、1泊2日の「お泊り会」を行っています。子どもとスタッフがそろったところで、夕ご飯作りを開始。低学年と高学年の子どもたちが互いを気にかけて、声を掛け合い、苦戦しながらもなんとか夕ご飯が出来上がります。協力して作った夕ご飯を食べるみんなは、とてもいい顔をしています。ごちそうさまの後は、公園へ。丸く輪を作って火花をする子、打ち上げ花火に興奮する子……あちこちで笑いの輪が広がります。2日目は、使った寝袋と毛布を自分たちで片付けることから始まります。その後、鬼ごっこをして朝食を食べ、お昼のサンドイッチ作りの準備に取り掛かります。買い出しに行った近所のスーパーでも、かごを持つ子、目的の食材を探す子、お金の計算をする子など、グループそれぞれに協力の形が生まれます。後日、ぶらいむ・たいむ前湯校の子どもたちがテレビに出る機会があり、



みんなで入るお風呂って、すごい

1931年から続く「家族」の歴史 —山中家族キャンプ

東京YMCA/山中家族キャンプ委員長 柏原 光太郎

毎年、8月初めに東京YMCA山中湖センターで行われる「山中家族キャンプ」。私が初めて参加したのは小学校2年生の時、今から40年以上前でした。社会人になってから一時遠のいていましたが、子どもが生まれたのをきっかけに十数年ぶりに参加しても、違和感はまったくありませんでした。その理由は、山中家族キャンプならではの運営方法にあります。0歳児から高齢者までが一緒に楽しむこのキャンプは、ベテランキャンパーを中心とした委員会が自主運営をしているのです。家族キャンプは今年で85回を迎えますが、過去の記憶はベテランから若いキャンパーに、伝えることなく引き継がれています。たとえば、私が初めて参加した時の「石割山ハイキング」「山中オリビック」「スタンプ」といったプログラムは今も健在です。何より一番の特徴は、老若男女を問わず、キャンピングで一緒に生活すること。家族キャンプは、それぞれの家

族だけでなく、キャンパー全員が一つの「家族」だからです。毎年100人を超えるキャンパーが集まりますが、みんなが家族ですから、危ないことをしている子どもがいれば、誰でも叱ります。その代わりにキャンプサイトにいけば「絶対に安全、安心だ」という思いも共通です。ここ数年、何組もの新しい家族を毎年キャンプに迎えています。リピート率がとても高いのです。彼らも、大きな家族の一員になったからでしょう。富士山を望むグリーンチャペルでの朝拝や、夜のキャンプファイヤーなど、キャンプは4泊5日続きますが、私にとっての一番の醍醐味は、終わった後に「帰っても、子どもたちは毎日キャンプソングを歌って、早く来年にならないかな、と言っているんですよ」という声を「家族」たちから聞くことです。



ビッグカヌーで、いざ！山中湖へ



1954年の「山中家族キャンプ」

家族で走る社会貢献! —YMCAインターナショナル・チャリティーラン

大阪YMCA/YMCA英語幼児園土佐堀園 園児保護者 藤城 志保

障がいのある子どもたちを支援する「インターナショナル・チャリティーラン」に初めて参加したのは、娘のYMCA英語幼児園への入園がきっかけでした。クラスメートのお母さまから、「チームを組んで、ファミリー・キッズランにエントリーしない?」と誘われた時には、「チャリティーはともかくマラソンなんて絶対ムリ!」と、心の中で叫びましたが、娘にとって素晴らしい経験になるに違いない!!と考え直し、一緒に走る覚悟を決めました。1キロちょっとのキッズランとはいえ、4歳の子どもにとっては大冒険。日頃、運動とは縁遠い生活を送っている自分にとっても、走り続けることは決してラクではありませんでしたが、お友達や園児の先生やウエルネスのリーダーたち、道道で見守ってくださっていた方々のエールが大きな励みになりました。途中何度か苦しげな顔をしながらも、弱音を吐かず、決して走ることをやめようと思わない娘の、入園前は明らかに違う心とカラダの成長。それをひしひし感じながら



ファミリー・キッズランを走り終えて、「完走賞」の賞状を手にする家族たち

NEWS
各地の動きをご紹介します。

●「フィリピン 台風30号被災地支援
ワークキャンプ」報告 —YMCAせとうち

2013年に発生したスーパー台風ヨランダは、フィリピンに甚大な被害をもたらしました。バナイ島のイロイロYMCAは、タンバリザという小さな島で復興支援を開始。2014年にスタートしたワークキャンプは、今回で3回目となりました。2月24日～3月1日の日程で、盛岡・とちぎ・茨城・名古屋・せとうち・福岡の6YMCAから11人の若者が参加。特に今回は、岩手県宮古市の高校生の山根あかりさんが、東北の被災地から支援を届けてくれました。 YMCAせとうち 白鳥 雅人

◆新しい故郷、フィリピン

私はワークキャンプも、海外も初めてでした。もともと海外に行きたいと思っていましたが、行くとなるとあらためて「現地の人と打ち解けられるか」「現地の生活に慣れるか」など、不安に思うこともありました。しかし、台風の被害を受けたタンバリザで、家族の成長を刻んだ家や、思い出の話まった学校が壊れてしまったという事実を知り、自分の地元の宮古を思い出しました。



タンバリザの子どもたちに、日本の遊びを伝える山根あかり

小学5年の時、今まで体験したことのないような地震が起こり、地震がやんだかと思うと直ぐに津波警報が発令されました。最初は2mぐらいの津波だと言われ、いつものことと安心していましたが、分刻みで波の高さが引き上げられていき、間もなくたくさんの人の思い出が刻まれた町を襲いました。その光景を、私はただ、避難場所から眺めることしかできませんでした。

私たちが東日本大震災でたくさんの人たちに助けてもらったように、今度は私が、同じようにつらい思いをし、傷ついた人の心を少しでも癒してあげたいと思いました。

タンバリザでは現地の高校生と、日本やフィリピンの遊びの話したり、ホームステイ先では日本にいれば聞くこともできなかったような台風ヨランダの話の話を聞いたり、本当に内容の濃い一日一日でした。

ワークキャンプ中、私はキャンプに来た意味を考えていました。学校のステージを修復するというワークは完成できませんでしたが、ただワークをするためではなく、こうして言葉の違いや文化の違いを越えて関わりを持つために、私はここに来た気がします。私にとってフィリピンは、家族のように大切な人たちがいる故郷になりました。

盛岡YMCA 山根 あかり

●「第21回学生YMCAインドスタディキャンプ」報告 —学生YMCA

強い日差しが照りつける3月のインドで、私を待ち受けていたのは今までに経験したことのないような刺激的な日々でした。

3月2～19日の約3週間、YMCAに関わりのある4人の学生と引率スタッフとで、南インド各地を訪れました。貧困が原因で家族と暮らすことのできない子どもたちが共同生活する施設(セントポニファスアンバハム)を中心に滞在し、現地で活動するYMCAやNGO団体を訪問する中で、インドが抱える諸問題や特有の文化を肌で感じる事ができました。

私が今回のキャンプで大切にしたのは、現地の人たちと積極的にコミュニケーションを取ることでした。不慣れた英語ではありましたが、疑問に思ったことはなんでも質問し、インドの社会や文化について理解を深めようと努めました。タミル語しか話すことのできない子どもたちとも、一緒にダンスやスポーツをし、行動を共にするうちに言語の壁を越えたような気がしました。



現地の子どもたちと、右から3人目が三浦さん

就寝前には毎晩、その日一日を振り返り、印象的だったことや各々が感じたことをキャンパー全員で分かち合いました。自分の感想や考えを語る中で、共に笑い、時には衝突することもありましたが、この時間があつたからこそ、私たちは本気で思いをぶつけ合うことができる仲間になりました。

「私の人生は、小さな、貧しい子どもたちのために」と語る現地コーディネーターのスレッシュ氏の言葉を聞いて、「私は何／誰のために」生きるのかと考えさせられました。大学を出て就職をして…という親の期待やお決まりのルートではなく、自分の人生を邁進していいのだと、生きるヒントが見えたようでした。

参加するにあたって、私を支援し、後押ししてくれたOBの方や仲間へ感謝し、現地で得た貴重な経験を多くの人と分かち合い、今後の学生YMCAの活動に生かしていきたいです。

慶應義塾大学YMCA 三浦 元吾

100 YMCA TOYAMA YMCA東山荘 次の100年に向けて ④

「賀川豊彦ら、先人たちから受け継ぐべきもの」

広岡浅子(NHK連続テレビ小説「あさが来た」の主人公のモデル)は100年前、御殿場の別荘では女性指導者の養成を行い、東山荘の献堂式では女性と共に日本社会の変革を行うことを青年に託しました。



旧農協のマーク

当時、御殿場には多くの外国人の別荘も建てられました。そのうちの一人、米国人宣教師のジョージ・ワシントン・ポールデンは、昭和大恐慌や籾の価格の暴落で借金に苦しむ農民救済のために「二岡養豚組合」を結成。そこで、養豚養鶏とハム・ソーセージ作りを農民たちに教えました。そして農民たちは、ポールデンの助けを得て「御殿場養豚加工組合」を設立するに至りました。

同じころ、御殿場の高根の農民たちは、賀川豊彦を招いて「御殿場農民福音学校」を建設しました。賀川はその後、東山荘で行われた第47～49回夏季学校(1937～39年)に講師として来荘しています。青年にキリストの福音を語った賀川は、農民福音学校で託児所(現高根学園保育所)も開設しました。また、農協の基本理念である立体農業論(多角的農業経営)の実践にも努め、旧農協のマークを考案したとされています。新約聖書に記された「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」という言葉をもとにデザインされ、「協」の字の偏(左側)には麦の茎と同時に、十字架を見て取ることができます。

第二次世界大戦での敗戦によって、日本社会は民主化が進められていきました。御殿場の別荘地は森へと戻っていきましたが、先人たちが東山荘での学びを日々実践し、社会改良と自己変革のために労した歴史は今も残っています。先人たちの精神を受け継いで「真の豊かさ」を求めていくことが、次の100年も果たすべき東山荘の使命であると考えます。

YMCA東山荘所長 堀口 廣司

○YMCA東山荘100年募金へのご協力をお願い。ご寄附は日本YMCA同盟 HP内のサイトで受け付けています。<https://srv.asp-bridge.net/ymca/index/>

●クリアファイルを配布 —YMCAに連なる全国のユースに向けて —日本YMCA同盟

日本YMCA同盟ユース委員会、世界YMCA同盟「チェンジ・エージェント」、アジア・太平洋YMCA同盟「ユース・レプス」のプログラム参加者が中心となり、クリアファイルを作成しました。YMCAに連なるユース世代のスタッフ、学生、ボランティアの一人ひとりに向けて、「YMCAはユースのユースによるユースのための団体であり、一緒に声を上げよう」というメッセージを込めました。また、デザインも毎日使えるポップなものを目指しました。クリアファイルに挟み込むリーフレットでは、多様な場で活躍中のユース世代の皆さんのストーリーを紹介しています。ぜひ、いろいろな機会にご活用いただければと思います。 日本YMCA同盟ユース委員会 委員長 廣瀬 頼子



全国12,500人のユースに配布されたクリアファイル

●2016年「YMCA聖地研修」報告 —主催：日本YMCA同盟、主管：熊本YMCA

2月25日～3月2日の7日間、「YMCA聖地研修」が行われました。実は2011年に、坂口順治氏(東京YMCA名誉会員・元立教大学教授)から「スタッフ育成トレーニングの最も有効な学習方法の一つ」として聖地研修の実施を提案されていました。それが今回ようやく実現し、YMCAの会員、役員、スタッフ、教会関係者など9人が参加することができました。研修の主な目的は、イエス・キリストの歩みを追体験して信仰の原点に立ち返ること、そして「平和の実現」というYMCAの使命に向き合うことでした。

以前から日本のYMCAは、イスラエルの占領下で傷つき苦しむパレスチナの人びとと共に、彼らの生活の糧であり、希望の象徴でもあるオリーブを植える活動「オリーブの木キャンペーン」に参画していますが、今回はYMCA聖地研修の一環として、このキャンペーンなどを通して日本のYMCAと深いつながりのある「東エルサレムYMCA」を訪問しました。その拠点の一つ、ベイトサフルYMCAは、心身に深刻な傷



オリーブ山から聖地エルサレムを見渡す

を負った子どもや青年のためのリハビリに取り組み、私たちはパレスチナでの平和の実現を、強く願わずにはいられませんでした。

私たちは聖地研修を通してイエス・キリストの生き方に学びつつ、神と人に仕え、平和を実現する働きを担っていかなければならないという思いを、今、新たにしています。

熊本YMCA 久保 誠治